

# 花粉症で低下、がんリスク

## がん社会 を診る

中川 恵一

5月に入り、ようやく花粉症が楽になってきたという読者も多いと思います。

花粉症は、花粉に対するアレルギー反応によって起こります。花粉に対してIgEという抗体が作られ、免疫細胞の一つである「肥満細胞」の表面に結合します。同じ種類の花粉が再び体内に入ると、IgE抗体と「抗原抗体反応」を起こし、肥満細胞からヒスタミンなどの化学物質が放出されます。これがくしゃみや鼻水、目のかゆみといった症

状を引き起こします。

IgEは石坂公成・照子夫妻によって1966年に発見されました。IgE抗体は、寄生虫が腸に侵入したときに重要な役割を果たします。寄生虫に特異的に反応するIgE抗体が肥満細胞を刺激し、寄生虫の定着を防ぎます。寄生虫感染が激減し、行き場を失ったIgE抗体が花粉症を引き起こしていると考えられます。

がんは全体で約6割、早期

であれば9割が治ります。その点、花粉症は一度発症すると完治はまれで、長く付き合っていないかなければならない病気です。

がんは細胞の老化といえる病気です。加齢とともに臓器の表面を覆う上皮細胞の遺伝子にキズが積み重なり、がん細胞が発生します。年齢を重ねると毎日発生するがん細胞の数は増えていきます。一方、免疫細胞ががん細胞を察知して未然に倒す「免疫監視機構」も加齢によってパワーを失いますから、年齢とともにがんが増加することになります。

その点、花粉症がもっとも多いのは免疫の働きが活発な10代で、年齢とともに有病率は低下していきます。重症度も同様の傾向があり、年齢とともに症状が楽になったと感じる読者も多いはず。

嫌われ者の花粉症ですが、

プラス面もありそうです。花粉症のようなアレルギー症状をもつ人では、すい臓がんや大腸がん、食道がん、胃がん、口腔（こうくう）がん、喉頭がん、子宮体がん、脳腫瘍などの発症リスクが低下するとの調査結果が出ています。とりわけ5年生存率が1割程度で、最凶のがんといえる膵臓（すいぞう）がんのリスクが、花粉症になると低下するというのが研究結果が増えているのは朗報でしょう。

8つの疫学調査の結果を統合して分析した「メタアナリシス」の結果でも、花粉症の人は膵臓がんの発症リスクが4割も低下していました。過剰な免疫反応が起こっている花粉症の人は、免疫監視機構の働きも強まっているのではないかと思います。

とはいえ、無駄な造林という失敗から深刻化した花粉症です。岸田文雄首相には約束通り、対策を進めてもらいたいと思います。

（東京大学特任教授）



イラスト 中村 久美